

連載 プロマネの現場から

第 104 回 立花宗茂に学ぶ不遇期の過ごし方

蒼海憲治 (大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

前回、関ヶ原の合戦における戦い前の人間ドラマの一端を書かせていただきました。また、以前、この関ヶ原の合戦で西軍についたため、一度は領地をすべて召し上げられながら、奇跡の復活を果たした立花宗茂の様子を「第 85 回 立花宗茂・奇跡の振り返り」で紹介したことがあります。

先日、復活を遂げるまでの不遇の間、宗茂がどのような生き方をしていたのか、についての記述を、河合敦さんの『関ヶ原 敗者たちの復活戦』(*1) で目にしました。本書、関ヶ原の合戦後、西軍についた大名の多くは、改易・減封されますが、いったん改易された後、復活を果たした大名が、数少ないものの存在し、各々復活の理由を解き明かされています。その中でも、やはり宗茂の生き方が、現代でも、いっけん左遷とも受けとめられるような処遇や人事になった際の不遇期の過ごし方の参考になると思っています。

立花宗茂の場合、「力を蓄えた浪人時代」があった、といます。

浪人時代のこの間、宗茂は、単に徳川家に御家再興を懇願するばかりではなく、余暇を利用して自分のスキルを、驚くべき速さで向上させていった、といます。

宗茂がこの浪人時代に、中江新八や吉田茂武（しげたけ）から弓術の免許を受けたことがわかっています。また、妙心寺の了堂宗歇（りょうどうそうけつ）に帰依して、禅の修行にも励んだともいわれています。このように、心身ともに鍛え、己を磨きました。

もともと宗茂は、丸目蔵人頭長恵（まるめくろうどのとうながよし）から剣術の免許を得ており、剣の達人でした。

さらに後年の記録によれば、連歌や茶道、香道、蹴鞠（けまり）、狂言などに通じていたことも判明しており、おそらくそうした文芸・遊芸に磨きをかけたのは、この浪人時代でした。つまり、浪人時代、宗茂は、決して自暴自棄にならず、心身の鍛錬に励んだのでした。

その結果として、宗茂自身の器を大きくし、将軍秀忠や家光の信頼を勝ち得ることになっていったのだ、といわれています。

宗茂には、大きく 2 つのスキルがありました。一つは、「武のスキル」であり、宗茂自身、数々の戦いで戦功を挙げ、なおかつ、軍略や戦術など深い軍事知識を有していたことです。

もう一つは、「文のスキル」であり、連歌や茶道、香道、蹴鞠（けまり）、狂言に通じていたことで、平時においても重宝されました。

さらに、宗茂の性格は、裏表がなく、人に愛される性格でした。結果、余人を持ってかえがたい人物となった、といます。そして、これこそが、宗茂復活の秘訣かもしれません。

この宗茂の過ごした時間は、企画の達人とも仕掛人ともいわれる高橋憲行さんにいわせると、不遇期の最高の過ごし方をした、といえるのかもしれませんが。株式会社企画塾を主宰されている高橋憲行さんは「不遇期は、実は『人生最高の時』ではなかろうか」と、より積極的な捉え方をされています。

高橋さんは、『人生は企画だ!』(*2)の中で、不遇期をこう捉えています。

「ボクの昔からの関心事は、世の中の少なからぬ成功者に共通して、「不遇期が意外と長い」ということだ。またそういう人々はこの時期に、諦めず、自分の思い入れたことにエネルギーを注ぎ、執拗に成功へのシードづくりに励んでいる。この点に注目すべきだ。」といます。

また、それはなぜなのか。

「なんたって最大の資源『時間』をもっとも多く使えるのが、この不遇期。時間があるから知恵のためにも使える。調査のためにも利用できる。不遇だと誰もつきあっちゃくれないから、なお時間ができる。

その時間で真剣に人生を考えることもできれば、未来を考えることもでき、新事業であれ、新たな企画であれ、家族の将来であれ、さまざまに考え、思いを巡らすことができるという寸法だ。

不遇期は、次の飛躍のシナリオを考える期間。そのために十分な時間が与えられたと考えるのが、妥当なところだ。不遇期になにもせずボヤしていたら、こりゃもう、さらに後戻りの人生。「ジリ貧」人生か、不遇からさらに転落する人生しかないってこと。」

最後の、十分な時間を有効に使わず、ボヤっとしていたらのくだけは、ドキッとしますが、適切な指摘だと思います。

では、この不遇期をどう過ごせばよいのか。より具体的な過ごし方についてのヒントが、岡崎太郎さんの『履歴書無用! どん底と成功のサバイバル物語』の中で、「V字回復のための9つのルール」として示されており、参考になるとおもっています。

1. 苦しくとも、人を裏切らない、縁を切らない
2. やる気の火を消さない

3. 自信を持続させるための習慣を持つ
4. 「最悪」を想定し、保険をかける
5. シンプルに考える
6. 甘え・依存、余計な遠慮、社会的な体裁を捨てる
7. 「今からでは遅い」「あと△年若ければ」は禁句にする
8. 自己表現の道具を持つ
9. 毎朝、「想像」の時間を設ける

プロジェクトや仕事の上で大きな失敗を犯したり、信頼を損なった場合、仕事を干されたり、希望しない部署へ異動になることもあると思います。

そんな不遇期においても、腐らず、諦めない限り、振り返りのチャンスはあることを示しています。

アサインされた部署が停滞している部署であればあるほど、改善する余地や改善時の効果は劇的であるかもしれません。

しかし、その施策をするためには、信頼回復が必要となりますが、不遇期に、実直にやるべきことを積み重ねることが次につながるのだと思います。

(*1) 河合敦『関ヶ原 敗者たちの復活戦』グラフ社、2009年刊

(*2) 高橋憲行『人生は企画だ!』日本実業出版社、1988年刊

(*3) 岡崎太郎『履歴書無用! どん底と成功のサバイバル物語』亜紀書房、2011年刊